

「^{かしこ}畏まる」文化と「^{かしこ}賢がる」文化

— 忠臣蔵と春香伝を中心に —

朴 容 寛

はじめに

1. 『忠臣蔵』と『春香伝』の筋書き
 - (1) 『忠臣蔵』の筋書き
 - (2) 『春香伝』の筋書き
2. 『忠臣蔵』と『春香伝』の比較
 - (1) テーマとその含意
 - (2) 主なシーン
 - (3) 生死観
 - (4) 社会文化
3. 「^{かしこ}畏まる」文化と「^{かしこ}賢がる」文化
 - (1) 受動形と能動形
 - (2) 頑張れとクエンチャナ
 - (3) 遠慮と自慢
 - (4) 実利と名分
 - (5) 刀の文化と筆の文化
 - (6) 死の美学と生の美学

おわりに

はじめに

韓国と日本は海を共有している隣の国であるにもかかわらず、よく近くて遠い国であるといわれてきた。ところが、韓日両首脳の「21世紀に向けた新たなパートナーシップ宣言」(1998年10月)や2002 FIFAワールドカップの韓日共催がきっかけになり、韓日関係は友好親善関係になりつつある。この最中、歴史教科書歪曲問題、小泉純一郎首相の靖国神社参拝問題、北方四島周辺地域での韓国サンマ漁船の操業問題などが起こり、韓日関係は冷え込み、一層悪化しつつある。このような韓日紛争、つまり、両国が互いに不信に陥り、憎み、怨み、誤解しあう根本的な原因は何であろうか。韓国と日本はよく似ている文化をもっていながらも、異なる面が多い。にもかかわらず、互いに相手の国が自分の国と大抵同じであり、相手の国をよく知っているという錯覚に陥るからではないか。自分の国の眼、思考、文化から相手国を判断するから諸誤解が生じ、異質な点を互いが尊重しないから諸摩擦が生じるのではないか。

本稿の目的は、それぞれの国民が馴染み、親しみ、老若男女を問わず、共感を持ち続けてきた物語を取り上げて、韓国と日本の文化的な特徴を抽出すると同時に、その特徴から両国の異質性を明らかにすることにより、相互理解、相互認証の道を開くことにある。この分析に値する作品は、一時的に流行ってから過ぎ去った物語ではなく、時代を超えて何百年も続いてきた物語、ある特殊な階層にとどまるのではなく、社会の全階層の喜怒哀楽を反映してきた作品でなければならない。愛の物語なら韓国の『春香伝』、日本の『金色夜叉』¹⁾を取り上げることができる。『金色夜叉』は、明治の出世主義と文明開化の中から生まれた恋愛物語であり、熱海を背景としている。この物語は一時的には韓国でも「李秀一と申順愛」というタイトルで脚色され、韓国の大同江を背景として上演されたことがある。しかし、韓国人はこの物語に対して「嘘つき、空々しい」と感じ、しばらくしてその姿は消えてしまった。悪代官や悪徳商人などを懲らしめる物語なら、韓国には『春香伝』以外にも暗行御史朴文秀や李ムンキの物語²⁾があり、日本には「水戸黄門」や「遠山の金さん」などがある。しかしながら、多くの異本³⁾があるばかりではなく、公演回数や観客動員数、長い間人気があることがないなどの面から見ると、『春香伝』と『忠臣蔵』に勝るものはないと思われる。また、儒教の背景で士の世界の対する賛美と社会正義を求めており、現在の政治体制を肯定する面でも同じである。そして、両作品とも、この世の教訓、教示、模範、倫理、道徳的な理想像の提示の点でも同じである。したがって、本稿では、大抵同じ時期に生まれ⁴⁾、300年ぐらい過ぎた今もなお国民の心を捕らえ⁵⁾、親しまれ、賞賛され、長く深く人気のある作品である韓国の『春香伝』と日本の『忠臣蔵』を取り上げたい。

1. 『忠臣蔵』と『春香伝』の筋書き

(1) 『忠臣蔵』の筋書き

『忠臣蔵』の物語は、今から300年前の事件であるが、浄瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」以来、歌舞伎、芝居、落語、浪曲、講談、映画、TV、アニメ、オペラなど、その時代時代の大衆芸能の代表作品として常に日本人に親しまれてきた。今日も新春を迎えるにあたり、敗者の祟りを避け、新年の幸いを予祝する日本の祭りとして上演され続けている⁶⁾。その筋書きは次の通りである⁷⁾。

イ) 江戸城松の廊下での刃傷事件と赤穂城の明け渡し

元禄14年(1701)3月14日、皇室から徳川将軍家への使いの接待役を命じられた播磨(兵庫県)赤穂藩主・浅野内匠頭長矩は、礼式指南役の高家吉良上野介義央に度重なる意地悪に侮辱された⁸⁾として、江戸城松の廊下で切りかかり、刃傷沙汰に及んだ。ところが、梶川与惣兵衛に抱きとめられて目的を果たせず、却って将軍の怒りにふれ、長矩は網籠で愛宕下の田村右京大夫邸へ送られ、その日のうちに切腹させられ、泉岳寺へ葬られた。

主君の刃傷の悲報は早水藤左衛門、萱野三平の両士によって江戸から赤穂まで155里、普通なら15~16日もかかるところを僅か四昼夜半で行き、3月19日の午前6時頃、赤穂城内の大石屋敷へ到着した。続いて第二の使者原惣右衛門、大石瀬左衛門の両名が午後9時頃到着、長矩の切腹を知らせた。

主君長矩の切腹、江戸藩邸の接收などの凶報に、家老であった大石内蔵助は藩士300余

人に総登城を命じ、3月19日、20日、21日の3日間、更に3月27日、28日、29日と城中大広間で大評定を行った。籠城論、復讐説、開城論、殉死嘆願説など議論があったが、結局無血開城ということになった。その際、内蔵助に従う者はわずか50余人に過ぎなかった。4月19日には、幕府の収城使龍野藩主脇坂淡路守が大手門から4,500人、備中足守の城主木下肥後守が塩屋門から1,500人の軍勢を引きつけて入城し、内蔵助らは本丸玄関で上使を迎え、5万3千石の赤穂城を明け渡した。ところが、吉良上野介は隠居はしたものの、何のお咎めもなかった。

ロ) 仇討ち及びその処分

内蔵助は城明け渡しの際の残務を整理し終わった6月の末、無念の涙のうちに赤穂を退出し、山科の家に移った。そこで、彼は播州や上方、江戸の同志と連絡をとりながら、浅野家の再興を図ったが、果たされなかった。急進派を中心に主君の仇討ちの気運が盛り上がり、内蔵助を中心に、江戸・本所松坂町の吉良邸の様子を探るなど、上野介に対する復讐の準備が着々と進められた。同時に、内蔵助らは吉良や上杉のスパイの目をくらすため、連日京都の祇園や島原に入り、遊ぶふりをした。

同士の離脱はあったが、残った47人が元禄15年12月14日の夜、吉良邸へ向った内蔵助ら23人は表門から、大石主税良金ら24人は裏門からそれぞれ討入った。吉良邸へ討入った47士は上野介の姿を探し求めながら部屋の中や庭のあちらこちらで吉良の家来や上杉の附人たちと刃を交えて戦った。戦い始め約2時間過ぎたが、上野介は見付からなかった。午前6時頃、台所に続く炭小屋に隠れていた上野介を見つけ、内蔵助が一刀を刺し、一番槍の十次郎が首を挙げて本懐を遂げた。

上野介の白髪首を挙げた内蔵助ら47人は吉良邸の裏門に近い無縁寺へ向かい休憩するつもりだったが、一同の異様な風態に怖れをなした回向院は開門しなかった。内蔵助らは墨田川沿いの永代橋を渡って泉岳寺へ引揚げた。ここで、寺坂吉右衛門は大石からの密命を受けて門前から姿を消した⁹⁾。内蔵助らは、まず上野介の首を井戸で洗って、主君の墓前に供え、亡君の無念を晴らした。

“恐れながら亡君尊霊蓮性院見利大居士へ申し上げ奉る。去る御切腹のその折から、跡弔えとの御遺言堅く守り、吉良¹⁰⁾が首級をあげ、御位牌に手向け奉る。草葉の陰にてお受け下さるべき”¹¹⁾。

46人は、ただちに細川・松平(久松)・毛利・水野の四家へ預けられた。彼らの処分をめぐる幕府内部で議論があったが、元禄16年2月4日、徳川幕府は全員切腹死罪を申し渡した。46人全員は切腹となり、泉岳寺にある主君の墓所の隣へ葬られた。

(2)『春香伝』の筋書き

朝鮮時代の肅宗(1661~1720)が即位した頃、民衆の口から口へと伝えられてきた口伝説話がパンソリ¹²⁾演奏者により唱物語として語られ、後に小説化された。それ以来、マダン劇、アニメ、オペラ、映画、テレビドラマ等を通じて広く愛好されてきた¹³⁾。その主な筋書きは次の通りである。

イ) 李夢龍と成春香との出会いと熱愛

李氏朝鮮時代、全羅道、南原地区を治める代官の長子である李夢龍(16才、以下では「李道令」¹⁴⁾という)は、父の赴任に従ってこの地で暮らし始めて数か月が経っていた。間近に迫った上級官僚になるための科挙試験勉強に余念がなかった。勉学ばかりに嫌気がさした李道令は、たまには息抜きもしたいと、憂さ晴らしに召使いの房子¹⁵⁾にこちらの名勝地である廣寒楼へ連れていってもらった。折しも端午の節句の日、戸外では賑やかなラッパの音と共に相撲が繰り広げられ、林の中では少女たちがブランコ遊び¹⁶⁾に興じていた。李道令は、美しい春香(16才)が大樹のふもとで大空をめがけて勢いよくブランコを漕ぐさまを見て、心を奪われ一見惚れてしまった。

春香が元の妓生¹⁷⁾月梅の一人娘であることが分かったと、李道令は即座に春香を呼ぶように房子に命じる。だが春香は、直接会いに来るべきだという趣旨の即興の詩を残してその場を立ち去ってしまう。春香の意図と聡明さを察した李道令は、深夜、闇に乗じて春香の家へ押しかけて、春香の母親にお宅の娘とヤラセロと言い出す。押し問答のあげく、これは遊びではなく、春香を娶り、正式な妻に迎える云々を、彼女の着ているチマに一筆書いて永遠に変わらぬことを誓う。これで、二人の百年の契りが結ばれ、互いに深く愛し合い、夢のような日々を過ごした。

ロ) 別れとハッピーエンド

この幸福も東の間、すぐに試練が訪れた。李道令の父が都へ栄転することになり、李道令は漢陽(ソウル)へ戻らなければならなくなった。縁の下に転がり落ちて泣いている春香に、李道令は、「きっと期す日のあるなれば、京に上りて科挙受かり、立身出世し、そちを連れて行く」と誓いながら、二人は別れた。李道令は春香と婚約したことを父には言えずにいたのだ。

春香は李道令の帰還を今か今かと待ち続けている。美貌は衰えることなく、ほんのりと色気も漂ってきた。季節が過ぎ、南原に新しい使道(サト)¹⁸⁾が任命されることになった。春香の美しさを聞きつけ、大きな任地を辞退して田舎の南原府に赴任してきた下学徒(以下では、「下サト」という)である。この新しいサトの仕事の始まりは国中の芸妓を挨拶に来させることである。ところが、いくら待っても春香が見えないのに苛立ち、かんかんに怒り春香を「呼ぶにぐずぐずすれば、工房刑房以下、各庁の頭を、一人残らず笞刑に付そう」とわめく。拒む春香を無理やりに出頭させ、「おまえの母親が芸妓なら、おまえも芸妓だ。おれのそばに仕えよ」と高圧的に命令を下す。これに対し、春香は、夫のある身でもある故、二夫には見えないとかたく拒む。烈火のごとく怒り狂う下サトは、涙ながらに精一杯反論する春香に反逆罪という濡れ衣を着せて、過酷な拷問を加え、その場で首枷つけて投獄する。

この代官、農民から法外な税を取り上げ、昼間から飲めや歌えやの宴会の日々に明け暮れていた。住民の不満はピークに達していたが、恐くてだれも諫言できない。その頃、漢陽で勉学に励んでいた李道令は、科挙試験にトップで合格し、暗行御史¹⁹⁾というシークレット・エージェントになり、南原に遣わされた。世を忍ぶために乞食に変装した李道令は監獄に監禁された春香にこっそり会いに行く。このぼろをまとっている彼の姿に春香の母は驚き、落胆を隠せない。娘の運命を案じ、嘆き悲しむ。

変わらぬ愛を誓う春香と李道令だったが、春香の身は下サトの誕生日に、処刑される運命だった。翌日、廣寒楼に各地の守令たちが招かれ、下サトの誕生を祝う宴が盛大に催された。そこへ李道令がやはりみすばらしい身なりのまま、招かれざる客として押しかけ、ご馳走をねだったり、芸妓に酒を注がせたりと、さんざんに下サトを愚弄し、彼の政治を誹謗する詩をつくって祝宴をメチャクチャにしてしまう。

その場でも、春香は最後まで下サトの妾となるのを拒絶し、李道令に貞節を守る。やがて下サトが春香を処刑しようと呼び出したところへ、それまで隠れていた李道令の部下が廣寒楼に乗り込み、馬牌²⁰⁾を高々と掲げながら大声で、「暗行御史のお出ましじゃ」と叫ぶ。そこで初めて真相に気がついた下サト以下、役人どもは慌てふためいて、みな地べたに平伏する。そこへ刺繍施せる官服に着替えた李道令が堂上に現われ、役所の倉庫を封鎖、不正行為の証拠書類を押収し、下サトの罷免を宣言すると同時に、牢屋につながれた無実の罪人の釈放を命じる。いよいよ李道令は階下にひれ伏した春香に「顔を上げてわしを見よ」という。すると、昨夕乞食の姿であった李道令が威風堂々とした姿で座っているのだ。春香は半ば溜息、半ば涙声で「あな、うれしや、御史がうれしや…(中略)…もし、これが夢ならば、永遠に覚めぬ夢あればよい」といいながら泣く。かくして、李道令は全羅道の左道右道を滞りなく巡り、民情を調べた後、春香の親娘と都へ帰り、末永く子孫代々、永久まで栄えた。

2. 『忠臣蔵』と『春香伝』の比較

『忠臣蔵』と『春香伝』の類似性に関しては、両作品を比較対象として選んだ理由を挙げた部分で取り上げたので、ここでは主に異質性を中心に比較してみたい。

(1) テーマとその含意

忠臣蔵のテーマは主君の仇という怨みを返すことであり、春香伝のそれは恋人との別れという恨みを解くことである²¹⁾。度重なる屈辱に堪えられなかった浅野は吉良に切りつけたが、居合わせていた梶川与惣兵衛に抱き留められ「吉良を打ち洩らせしその無念、骨髓に通って忘れ難し…(中略)…生き変わり死に変わり、鬱憤晴らさで措くべきか」と怨んだ。殿中の刃傷沙汰であったので、浅野はその日のうちに切腹が命じられる。浅野は家老大石に、「ナ、わが存念を」を残してこの世を去った。大石は主君のこの一句を五臓六腑に刻み、時を待って復讐することを同志と盟約する²²⁾。この主君の怨みを持っていた赤穂浪士は、吉良邸に討ち入り、刀で血を流して仇討ちをした。

これに対して、郎君を慕い悲しみ、食べても甘からず、寝ても安からず、恨みが積もる春香は、「行きたや行きたや、郎君追い行きたや。千里の路程をも郎君追い行きたやも、万里の路程をも、郎君呼ぶ路なら、あたしは行きたいや…(中略)…あたしのことなど、お忘れ下さったのか」²³⁾と、泣いたり、歌を歌ったり、詩を詠んだりして解いた。李道令は暗行御史として現われたにもかかわらず、即興の詩を書いて悪代官に立ち向かった。刀で返したのではなく、筆と頭で戦い、解決したのである。

(2) 主なシーン

松田定次監督の「赤穂浪士」(1971)の主なシーンは桜の花が満開し、その花びらが落ち

る場面と、まさに花びらのようにボタン雪が降り落ちる場面である。つまり、浅野が江戸城の松の廊下で刃傷沙汰を起こし、幕府の命により、田村邸の庭先で切腹したのは、桜の花びらが落ちる3月14日であった。そして、47人の赤穂浪士が吉良邸に討ち入り、襲撃したのは、まるで夜桜のような綿雪が降り注ぐ12月14日の夜であった。そして、その翌年2月4日、46人の義士は、切腹され花びらのように潔くこの世を去ったのである。このような死の兆しや緊迫感が最後まで続くので、「忠臣蔵」を見るうちには緊張せざるをえない。

これに対して、イム・グォンテク監督の「春香伝」(2000)を見ると、初めて李道令と春香が出会ったのは端午の節句の日で、春風そよぐ穏やかな日和である。また、二人が涙で別れる日も、暗行御史のおなりとする日も天気恵まれる。春香伝の初めから最後まで、ふざけたり、冗談を交じえたりするフヤケた雰囲気が続く。それが公私を混じってしまう現象にもつながるのは残念である。例えば、悪代官である卞サトが芸妓たちの申告を受けたところも、春香に対して、見えることを命じたところも、使道が仕事をしている邸の東軒²⁴⁾であった。

“広寒楼に歩み出で、服改めて官衙に入らむと、…(中略)…客舎に到着、東軒に席を定め、着任の膳をとりたる後、諸官の挨拶を受けることはなりましたが、軍官の執礼終り、六房が官属の伺候終るか終らぬうちから、使道大声で怒鳴りますには、芸妓頭を呼んで、芸妓の点呼せよ。…(中略)…使道ははじめから、春香のことばかり気にかけていましたので、いくら待っても、春香の名が出ぬゆえ、苛立ち耐え難く、…(中略)…つべこべ言わずに呼んで参れ。…(中略)…今日より身嗜綺麗に整え、余の側に守序るがよいぞ”²⁵⁾。

(3) 生死観

『忠臣蔵』では、屈辱的に辱めたり、不名誉だと感じたり、不忠に恥を感じたりするならば、死を惜しまない。例えば、浅野は將軍の殿中における抜刀刃傷沙汰を起こした者は、理由の如何を問わず本人は死罪、お家は断絶という厳しい法度があることを知っているにもかかわらず、さんざん辱められたことを堪えきかず吉良に切りかかった。

“貴公様はなぜ遅かった。御酒参ったか。…(中略)…(浅野の胸を打ち、いろいろこなしにて言う。浅野きつとなる)。…(中略)…貴殿の腹を立てられたその顔が、ちょうど鮎と同じことだ。…(中略)…鮎侍だ。ハ、、、。(出放題。浅野腹に据えかね、…(中略)…刀の柄へ手をかけ、息込む)殿中だ。…(中略)…お手前、身どもを切る気だな。おもしろい。お切りなされい。サア、切らっせえ。…(中略)…(これにて切りつける)”²⁶⁾。

殿中の刃傷は大罪で、ただちに屋敷は閉門され、浅野は重罪人の網乗物に乗せられた。その頃、ただ一人、浅野に付き添っていた早野勘平は、この事実を知らず、浅野の妻の文を届けに来た腰元お軽と庭で情事にふけていた。事件を知った勘平は、不忠を恥じてその場で切腹しようとする。

“(浅野は閉門仰せつけられ、網乗物にて只今帰られしぞ。…(中略)…勘平びっくりせしこなして…

(中略) ...勘平うろうろと当惑のこなし)。... (中略) ...勘平が武士は廃った。もうこれまで²⁷⁾。... (中略) ... (勘平は刀を抜き腹を切ろうとするを、おかる留めて) ... (中略) ...主人一生懸命の場にもあり合わさず、あまつさえ囚人同然の網乗物、御屋敷は閉門、その家来は色に耽り... (中略) ... それ故に切腹なして申し訳せん”²⁸⁾。

そして、46人の義士は全員、逃げず切腹して死んだ。彼らの行動は侍らしい行動であると賞賛される。そして、『忠臣蔵』には死んだ後の世界に関してはあまり語られていない。

これに対して、『春香伝』では、いくら現実が苦しくて耐えにくくても、生き残れば、いつかは幸せな未来があるという望みが描かれているところが見える。例えば、いまやいまやと自分を救ってくれるだろうと望みながら待っていた李道令が、乞食の姿で監獄に現われ、これ以上望みがなくなったことを知った春香は、自分の運命の悲惨さや自分が死んだ後、老母のことを心配しながら悲しく泣く。この春香に向けて李道令は「譬え、天が崩れることがあっても、抜け出る道があろうもの」と慰める。そして、『春香伝』には、この世の生活ばかりではなく、死後の世界に関する記述もたくさん出る。例えば、李道令と春香がはじめに会ったハネムーンの夜の対話は次のとおりである。

“そなたが死んだら漢字の中で、地の字陰の字選び、女偏の字になりなされ、わしが死んだら漢字の中で、天の字陽の字を選び、男の子の字のつくりになって、そなた女にわしの子の字、好いた二人の仲の好き、あの世の果てまで変わりゃせぬ。そなたが死んだらなるものがござる、天の河やら... (中略) ...早七年井戸の水が涸れても、一生涸れない恋の水になりな。わしが死んだら... (中略) ...一生対なし別れを知らぬ、鴛という鳥になりとうござる、池に鴛遊ぶのを見たら、わしが逢いに来たと思うておくれ。... (中略) ...そなたが死んだらなるものがござる、... (中略) ...ソウル鐘路の人定になり、わしが死んだら撞木になって、... (中略) ...鐘撞く音ごーんと響くようになろうじゃないか。... (中略) ...そんなら、また、死んで、なるものがあるわ。そなたが死んだら臼になっておくれ、わしが死んだら杵になろう、... (中略) ...そなたが死んで、上に行けるようにしてやろう。そなたが死んで、手引き白の上の石になり、わしが死んで、その下の石になって、... (中略) ...それなら、また、そなたが死んだら、なるものがある。そなたは死んで、砂浜のハマナスになり、わしが死んで、蝶となって、... (中略) ...春は三月微風吹けば、ともにひらひら舞おうというの如何じゃ”²⁹⁾。

また、春香は監獄で李道令に次のような遺言を残す。

“若様、明日はここの使道の生まれた日、... (中略) ...幾つかの笞をばようやく耐え、ついに杖死しますとき、人足のようなふりして、急いであたしの側に寄り、あたしを背負い手運び行き、... (中略) ...日当たりよきところに埋めておき、若様が青雲の志遂げならば、... (中略) ...ソウルの先山訪ね行き、その一隅に墓つくり、守節冤死の春香が、ここに眠ると碑を建てて下され。... (中略) ...可哀相なるは母、あたしを失くして、... (中略) ...どこの誰が追うてもくれよう”³⁰⁾

(4) 社会文化

『忠臣蔵』の江戸時代は武家社会であり、ゆえに畏まる文化が形成されていたのに対し

て、『春香伝』の朝鮮時代はソンビ³¹⁾、つまり文士(両班)社会であり、故に賢がる文化が形成されていたことが分かる。

『忠臣蔵』の場合、浅野は徳川将軍の命令に従い、指導役の吉良に慎んで礼儀作法を習った。浅野は吉良に何回かさんざんに辱められても、慎んで、畏まり、我慢したが、それに堪えられなくなり、その怨みを打ち返したのである。これが松の廊下での刃傷沙汰である。ところが、彼に切腹が命じられた際には、その上意を慎んで、次のように承り、従順に畏まって切腹したのである。

“(我々今日上使に立ったるその趣き、つぶさに承知いたされよ、…(中略)…懐中より御書とり出し押し披けば、浅野も席を改め、承るその文言…(中略)…浅野動ずる気色もなく)御上意の趣き委細承知仕る。…(中略)…今日上使と聞くよりも、かくあらんと期したる故、かねての覚悟御覧に入れん。…(中略)…刃傷に及びしより、かくあらんとは、かねての覚悟”³²⁾。

赤穂城を引き渡すときに、いろいろな議論があったが、結局、だれ一人も逆らわず、城を明け渡した。家老である大石は、むしろ、城の引き渡す残業を手伝った。畏まる文化では理解できるが、賢がる文化では到底理解できない。それから、大石らの47人が吉良邸に討ち入り、主君の仇討ちした後、彼らは逃げず、徳川幕府の決定に畏まり、46人全員は素直に切腹したのである。

これに対して、『春香伝』の所々に賢がる様子が覗える。例えば、春香は、朝鮮時代の社会階級で最下層である芸妓の娘として生まれたにもかかわらず、最高位の社会階層である両班が誇っている儒教の四書三経³³⁾などに精通し、様々な詩をつくったり筆で書いたりしながら賢がる。例えば、その地方の長官の息子が呼んでも、自尊心ある春香は「雁受海、蝶受花、蟹受穴」(雁は海を慕い、蝶は花を慕い、蟹は穴を慕う)という即興の詩を残してその場を立ち去ったのである。また、春香の母は自分の娘に対して次のように誇らしげている。

“ソウル紫霞洞の成参判が、補後南原に坐定せられしとき、鷹を鷲と見違え、わたしに守庁よう申せし故、上のお言葉さからえず、侍り申して百余日、殿はソウルに帰任され、その後生まれし形見の娘。…(中略)…七つの頃より小学を読ませ、修身齋家和順心を教えるに、由緒ある血筋を引きたる故か、物覚え早く、三綱五倫にたがわず、わが娘ながら天晴れの出来”³⁴⁾。

新しい代官が見えることを要求したとき、春香は、「忠臣は二君に仕えず、烈女は二夫に見えずという教えを、守らんと存じまするに、使道の命がそのようでありますれば、生きても死んだに如かず、二夫には見えぬ覚悟でございます故、どうなりと存分になさりませ」と強く反発する。使道は「官長嘲弄する罪は、死罪のがれる道はなく、使道逆らう罪咎は、厳刑流罪が動かさぬ、死ぬかどうかじゃ」と大いに怒っている。これに対して、春香は「夫ある身を劫奪するは、罪にはあらで何でござりましょう」と食って掛かっている³⁵⁾。

拷問を受け、硬い棒に打たれ、気絶するようになっても、春香は「あたしは、死後に冤鳥という鳥になり、招魂鳥と一緒に、この世を飛廻り、月明けき夜更けを、わが夫の枕元

に止まりて夢を破って逢おう」と言い張る。拷問の末、半死半生の体でありながらも、「使道お聞き下され、一念恨みを抱きたれば、生死かまわぬわが心、女の思いのきつくして、真夏六月霜置くとか。冤罪死したるその後は、冤魂空しく空に飛び、聖君坐しますときを待ち、区々たる怨み陳べますれば、あなた様もおそらく無事では済まされませぬ」と、ありったけの力を出して立ち向かっている³⁶⁾。お上の命令に従順にしたがって切腹した義士らの姿とは対照的である。

誕生の祝宴の際に、乞食の姿の李は「そこな使令、使道に伝えよ。遠くの乞食が、このような盛大な宴を見、酒と肴にありつこうと来たとな」と話し掛けながら、押し掛ける。いくら乞食であっても両班である限り、弱気にならず、賢がりながらその祝宴の場に参加してしまう。そのうえ、この乞食は堂上に並居る守令の前には、皆茶菓子が置かれ、山海の珍味が並べてあるが、自分のところには脚の揃わない松の膳に、跛の箸、もやしの和物、大根の角切りの漬物、濁酒一杯しか載っていないことに怒る。彼は立ちあがり、膳を足で蹴飛ばしながら、「そこの肋の肉を一つ下され」と大声を張り上げる様子はなかなかすばらしい³⁷⁾。殿様の前での宴会に入れてもらえただけでも、恐縮と考えるべきであるが、こんなに賢がるのは理解できないほどである。更に、彼は、こうも威張っている。「この乞食も、幼少の頃文字を多少覚えましてので、このような盛大な酒宴につらなり、酒や肴を飽食して、そのまま帰るのも気が咎めますれば、一首詠じて、暇しようかと存じまする」。この場で、作って詠んだ即興の詩が「金樽美酒 千人血 玉盤佳肴 万姓膏 燭淚落時 民淚落 歌声高处 怨声高」である。つまり、「金の杯の中の美味しい酒は千人の民の血にして、玉のようなるお盆のうえのよき肴は万人の民の膏なり、蠟燭台の蠟が落ちる時、民の涙も落ち、歌声の高いところに、民の怨みの声もやはり高まる」³⁸⁾と悪代官を愚弄したのである。

3. 「畏まる」文化と「賢がる」文化

本稿で注目したいのは、「畏まる」文化と「賢がる」³⁹⁾文化という切り口から日本の社会と韓国の社会の諸側面が再解釈され、理解されることである。

(1) 受動形と能動形

畏まる文化の中で生まれた日本語には、受動形の表現が多いのは偶然ではないと思われる。畏まる文化では、自分が何かを能動的に、かつ積極的に成し遂げるより、お上の意を伺うことが多い。お上の意に従うので、おのずと受動形が多くなる。そして、受動形が尊敬や可能の意味をもつことも多い。お上の意を伺って何かを実行するので、受動形は、ただちにお上の意を尊重することになるだろう。お上の意であるので実行する可能性も高くなるだろう。

これに対して、賢がる文化では、人にやらせられて何かをやるのを嫌がる。自分のことは自分がやりたい、自分が決めたいと考えるので、能動形が多くなる。また、韓国語には受動形が尊敬や可能などの意味を表わすことはない。受動の表現と尊敬や可能の表現などは厳密に区別されている。

(2) 頑張れとクエンチャナ

日本では、「頑張れ」という言葉をよく使う。試験勉強や仕事をする際の励ましの言葉も、ハネムーンに出発する際の挨拶の言葉も「頑張れ」である。頑張るというのは、何か恐るべき神、偉い人間、お上などから与えられたことを恐れつつ、慎んで成し遂げるために最大限の力を尽して努めることであろう。また、真剣に誠意をもって、熱心に努力することであろう。そういうわけで、何か頑張るときには、慎んで、心を締めくくる必要がある。頭には鉢巻きを、肩にはたすきを、そして禪を締める⁴⁰⁾のもこの延長線で理解できる。

日本語の「頑張れ」という言葉のような頻度で韓国人がよく使っている言葉の一つが「クエンチャナ」である。その辞典的な意味は、「標準よりさほど悪くはない。心配したり、はばかりする必要はない。特に困ったことはなく無事である」⁴¹⁾ことを言う。日常生活の中では大抵「大丈夫、心配するな、頑張っただね」というニュアンスでよく使う。賢がる韓国人も自信がなくなったり、相手に負けたり、やる気がなくなったりすることがある。このように気が沈み、意気消沈している彼らに勇気を与え、元気づけ、頑張るように励ます言葉が、他ならぬ「クエンチャナ」である。「今は多少負けても、失敗しても、心配するな」、「明日からは大丈夫、何とか頑張ればできる。いつかは人に勝つこともあるから心配するな」ということである。それ故、韓国には、七転び八起き、失敗は成功の母、ハミョンデヨンダ(為せば成る)という意味合いの言葉がはやっている。特に、1970～1980年代の高度経済成長期にはそうであった。日本の畏まる文化でも、“七転び八起き”、“失敗は成功の基”などの諺はあるが、“触らぬ神に祟りなし”、“口は禍の門”(言わぬが花)、“出る杭は打たれる”、“長い物には巻かれろ”、“石橋を叩いて渡る”などの諺もある。

(3) 遠慮と自慢

武士社会では、常に刀を持っており、相手の感情を刺激したら自分の命が危なくなるので、いつも慎んで命を承る必要がある。気兼ねしたり、遠慮したりする必要がある。これに対して、文士社会では、いくら口でののしったり、喧嘩をしたりしても命までは危なくない。それ故、武士社会では遠慮文化が、文士社会では自慢文化が芽生えやすい。

侍社会では、本音がばれると危なくなり、本音で話すのはなかなか難しい。したがって、侍社会では本音と建前の区別、どちらかといえば建前の社会にならざるをえない。大石は、争うことなしに赤穂城を明け渡した後、冷静綿密に主君の仇討ちの計画を進める一方、祇園の一方茶屋で放蕩の日々を送った。大石の本心が分からなくて不安を感じた忠義一途の家来たち三人は、これを聞こうと次のように試みた。

“（鎌倉へ打ち立つときは、いつごろでござるな）。さればこそ大事な事をお尋ねなさる。丹波与作が歌に、江戸三界へ行かんして、…（中略）…（また寝ころぶ）。…（中略）…（お頭へお願い申してやろうとお詞に縋り、これまで推参仕りました。吉良が屋敷の）…（中略）…そこもとは足軽では無うて、大きな口軽じゃの。…（中略）…仕損じたらこの方の首がころり、仕おおせたら後で切腹、どちらでも死なねばならぬというは、人参呑んで首くくるようなもの、…（中略）…（このうち、大石寝る）”⁴²⁾。

また、吉良の家来たちが、大石に仇討ちの本心があるかどうかを確かめるために、大石

が放蕩している遊郭を訪ねてきて次のような問答を交わす。

“(主人浅野の仇を報ずる所存はないか)。毛もない。…(中略)…城を枕に討死なすか、または主人の跡を追い殉死してみさっしゃれ、…(中略)…飲み居れ、さすわ。…(中略)…スリヤ恨みこそあれ、精進する気微塵もござらぬ。…(中略)…さて、この肴では飲めぬ。…(中略)…(主の命日に精進させぬ根性で、敵討つ所存はござるまい。このとおり主人吉良公へ申し立て、用心の門を開かせましょう。…(中略)…まだ、ここに刀を忘れておきました。…(中略)…ほんに誠に大馬鹿者の証拠、たしなみの魂御覧なされい。伴内取って抜いてみる。中身錆びている故。いかさま、さて錆びたりな赤鯛。…(中略)…いよいよ本心現われ、ご安堵)”⁴³⁾。

大石の本心を探ろうとした吉良の家来たちは、刀は侍の魂ともいわれる大石の刀が赤く錆びている様子を見て、大石はまったく仇討ちの意志などはなく、本心から放蕩三昧になっていると安心してしまう。これで吉良邸では安心し、赤穂浪士が討ち入る日にも「放埒に心も緩む油断酒に、前後も知らぬ寝入り」⁴⁴⁾をしたのである。

これに対して、文士社会では自慢話が多く、理想像をめぐるよく論争しあう⁴⁵⁾。自分の理想像とか意見と異なる相手にはすぐ悪口を言うてしまう傾向がある。それ故、韓国では悪口が非常に多くて、その意味を考えると想像を絶するほどである。例えば、「ビョラク マジャ ジュウルノム」は、雷に打たれて死ぬべき奴という意味をもつ。「ニユンピョン アルタ タムド モンネゴ ジュグルノム」は、よりひどくて、腸チフスにかかり、汗もかかず、そのまま死んでしまうべき奴だという意味をもつ。昔は、腸チフスのワクチンもなかったし、治療薬も殆どなかった時代だから、一度感染したら、菌血症、ついで40℃の高熱、バラ疹、脾腫などの全身症状を現わし、ついに死に至ったそうである。この病は汗をかかなければ治らないそうである。だから、腸チフスにかかり、汗もかかず、そのまま死んでしまうべきだというのは悲惨な罵りである。

ところが、畏まる文化では、悪口は少ない。日本で人をののしる言葉には馬鹿野郎や畜生などがある。広辞苑によると、馬鹿というのは、もともとは無知のことを表わすサンスクリットであるmoha(慕何)、またはmohallaka(摩か羅)の当て字である。その意味は痴、無知という意味である。つまり、馬と鹿をも区別し得ない無知な人、愚か者、痴者ということであろう。また、畜生というのも、仏教用語で、人に畜われて生まれている禽獣、虫、魚などの畜生道に生まれた者という意味である。つまり、人間ではなく、獣・虫・鳥・魚などのことである⁴⁶⁾。

また、畏まる文化では、常に慎んで相手を配慮し、気を配る必要がある。迷惑をかけたがり、相手の感情などを傷つけば、いつかそれが自分のところへ跳ね返るかもしれないからである。それ故、畏まる文化では、相手の気持ちに合わせて自分の態度を決めようと心掛けて傾向が見られる。例えば、日本では「いいえ」という答えはできるだけ避ける反面、「はい」、「はい」と応対する傾向がある。この際、「はい」は、相手が言うことを承知し、同意したという意味をもつが、必ずしも自分自身の意見が肯定であることではない。畏まる文化の中では、相手の心中を伺い、傷つけないようにいつも心掛けて傾向からである。常に、相手の気持ちを察し、相手の立場を配慮しようとするのである。

そして、「有難う」というのは、感謝する意味をもつ。これを文字どおりに、単純に解

積すると、相手にまだ難しいことが残っているということであろう。『日本国語大辞典』によると、「有難う」には、「存在がまれである、難しい、世に生きることが難しい。よい状態や、人の好意などに出会って、めったにないことと感謝する気持ちをこめて喜びたい気持ちである」⁴⁷⁾ という意味がある。この言葉は、まさに相手に畏まる、相手に慎む、という文化から生まれたのではないか。

(4) 実利と名分

侍社会では、実力が足りない、力が下であると、相手に降伏して相手のために忠誠を誓わなければ命が危なくなる。これに対して、ソンビ社会では、実力とか、実利よりも、重要になるのは名分である。理想像に照らしてどちらが正しいかである。正しいと考えることは、いくら力が足りなくとも守らなければならない。例えば、「2002年ワールドカップ」の共催の際、韓国は「2002年韓日ワールドカップ」(2002 FIFA World Cup KoreaJapan)という名分を重視した反面、日本は決勝戦を日本で開催するという実利を選んだのだ。

もう一つの例は、カナとハングルの作り方から覗える。独自の文字を持たなかった韓国と日本では、ともに中国の漢字を借用していた。古代の万葉仮名は韓国古代の吏讀とよく似ていたそうである。中国の文字を使用することで伴う不便さを克服するために、日本ではひらがなとカタカナを、韓国ではハングルを創製した。しかし、その内容と発明過程は著しく対照的である。日本では、万葉仮名の一部を気楽に切り落として仮名をつくり上げたが、韓国では当時の東洋思想・中国古典の考えを採用し、陰陽五行説・易学の思想・大極説までを引き出してハングルの新しく発明した⁴⁸⁾。

(5) 刀の文化と筆の文化

『忠臣蔵』も『春香伝』も士の世界に対する賛美であり、その発展可能性を描いたものであるが、前者では侍を、後者はソンビを中心に語っている。ここで刀と筆という両国の文化の違いが見て取れる。韓国の朝鮮時代と日本の江戸時代はともに儒教を統治の学として受け入れ、士農工商という身分制度を設け、社会秩序や社会の正義を保つとしていた。にもかかわらず、朝鮮時代では両班を中心とした社会であり、「士」とは主に文士を称してきたが、江戸時代は武士が中心になる社会であり、「士」とは武士であった。朝鮮通信使の日本紀行によると、日本には「兵農工商」の四民があり、科挙試験がなかったと、記録されている。文人の優位であった朝鮮から見ると、日本は「兵」、つまり武人が優位な社会であった⁴⁹⁾。

さて、古代にさかのぼればのぼるほど韓国と日本の社会や文化は似ているところが多かったそうであるが⁵⁰⁾、時代の流れにつれて風土の違い、開拓地の有り無しなどの違いがあり、韓国では文の伝統が、日本では武の伝統がそれぞれ固まったそうである⁵¹⁾。

日本で武士という言葉は奈良時代から見られる⁵²⁾。ところが、奈良時代や平安時代の武士は数の面でも、その社会勢力の面でも限られた存在であり、主に天皇の安全と都の平和の守り手としての役割を担っていた。しかし、935年「打ち勝ちて天下を取るべき」といながら古代天皇制国家に正面から挑戦した平将門の乱を境に武士の社会的な影響力は無視できなくなった。さらに、平安時代の末期、保元・平治の乱(1156年・1159年)をきっかけに武士は中央に進出、鎌倉時代(1192年～1333年)からは武士の伝統が固まり、江戸

時代(1603年～1867年)まで約700年間武家政治が続いた⁵³⁾。江戸時代の幕藩制度の下では、武士の役割は「自己の修身、君主の輔弼、諸民の教化、天下の警固」になり、さらに、武士は「人民を教へ治める役者」になり、治国の主体になった⁵⁴⁾。その後、尊皇攘夷運動の主役であった薩摩藩(鹿児島)の西郷隆盛・大久保利通、長州藩(山口県)の木戸孝允、土佐藩の坂本竜馬などは実は下級武士であった。それ故、1868年の明治維新から始まる明治時代(1868年～1911年)も、その後の大正時代(1912年～1926年)も、昭和時代(1926年～1989年)も、その延長線で理解することができる。

言い換えれば、武士道は中世貴族の没落ととも現われ、戦国時代以後、武士階級の精神的な支えとなり、江戸時代には幕府の政治的支配を精神的に支えてきた。明治維新によって四民平等となり、武士道精神はいったん背景に退いたが、明治政府の富国強兵策で軍事力を増大するためにその精神面を強化する意味で、武士道の再評価が試みられるようになる。要するに、時代ごとに多少の意趣の異なりはあるものの、中世以後の長い間保たれてきた武士の行動原理が日本の社会規範になり、日本社会に内面化されたのである。新渡戸稲造によれば、この「武士道はその表徴たる桜花と同じく、日本の土地に固有の花であり、封建制度の子たる武士道の光はその母たる制度の死にし後にも生き残って、今なお道德の道を照らしている」⁵⁵⁾のである。

これに対して、韓国では、935年に新羅が滅び、その翌年、高麗王朝が成立してから文に傾き始めた。958年には科挙制度が採択され、能力がある人は誰でも官吏になることができたのである。高麗時代の末期には、文士による政治に反抗して武臣の反乱(1170年、1173年)が起り、その後、1270年まで100年間の武人の時代があった。しかし、朝鮮王朝時代(1392年)からは儒教を国家の基本理念として定めた後、500余年間、両班政治が行われてきた。両班とは文士と武士を総称することであったが、いつの間にか文のほうに傾き、主に文士、つまりソンビを表わすようになったのである。

刀の文化と筆の文化の違いから言葉遣いも異なるようになる。例えば、日本語の真剣勝負というのは本当の刀で勝負を決めること、命をかけて戦うことである。適当とは使えないから、まじめにやる、本気でやるという意味がある。しかし、韓国では本物の刀の意味しかない。日本語で裏切者は裏で切ったもの、つまり敵に内通して、主人または見方にそむく者、約束・信義に反する行為をするものということ、韓国語の背反者にあたる。助太刀は、そばで刀の力で助けることで、仇討ちや果し合いなどに助勢する、一般に加勢する⁵⁶⁾という意味であり、韓国語の助力にあたる。その他にも、韓国語には用法がない取締役、メ切、締める⁵⁷⁾、紅葉狩り・花狩り⁵⁸⁾などが日本語にはある⁵⁹⁾。

(6) 死の美学と生の美学

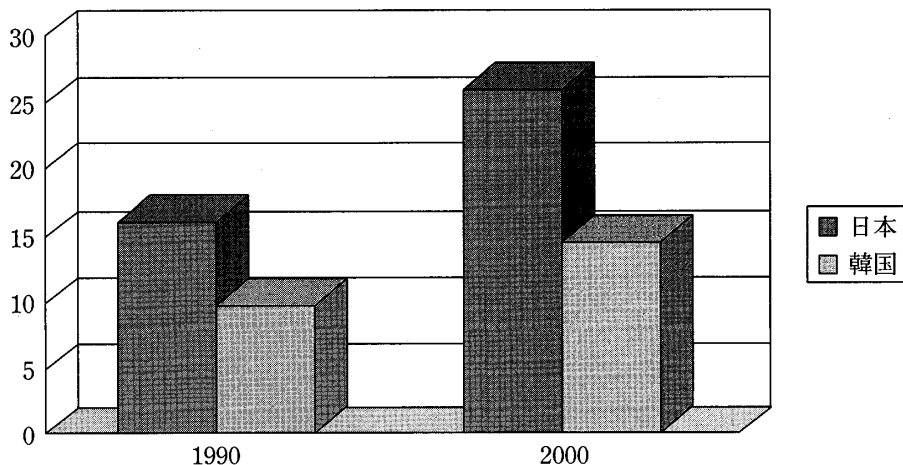
武家の文化と文士の文化の影響かもしれないが、日本では死の美学が、韓国では生の美学がそれぞれ発達している。

河合敦は47人の墓石群の前にて「なぜ、あなたがたは主君のために死んだのか... (中略) ...死にがい、そこに見つけたからだ」と自問自答し、「武士道とは何か。すなわち、死ぬことである」と結論を締めくくっている⁶⁰⁾。死にがいを求めていた侍の世界では、最大の苦痛を伴う自死こそが、勇気を示す最高の死に方であり、素晴らしいことだと信じ、賞賛され、切腹が制度化されたのである。切腹は平安時代末期にはすでに行われていた。江

戸時代になると刑罰としての切腹が確立された。切腹は武士道を守る神聖なる儀式であったのである⁶¹⁾。『葉隠』では、「武士道といふは死ぬ事と見付けたり。二つ二つの場にて、早く死ぬ方に片づくばかりなり」と語られている。つまり、武士道の本質は「死」であり、生きるか死ぬかという二つの選択のうち、早く死ぬ方を選択し、常に自らの死を臨めば人間は行動を誤らず、更に人間が過ちを犯すとすれば死ぬべき時に死ぬことだという⁶²⁾⁶³⁾。

これに対して、韓国では「犬の糞の上で転んでもこの世がよい」という諺がある。つまり、どんなに苦勞しようと思死より生きているほうがよいという意味である。現実がいくら苦しくても、理想像の社会を求めて頑張るのが韓国人である。そういうわけか韓国では切腹制度は確立されなかった。韓国でも絶望し、生の意味を喪失した時には自殺する人も少なくないが、日本よりは少ない。韓国人は、自殺すれば、恨みを持っているチョンガー(未婚の男)亡霊、処女亡霊になり、この世をあちこちさ迷い歩いていると考えている。

図 日韓の自殺者比較(人口10万名当たり)



日本人はいっぺんに満開し、潔く散りゆく桜を好んでいる。その見事な盛りが短いだけに、落花の美学が日本人の心々を魅了し魂を奪ってしまうのではないか。全身全霊を傾け枝全体、木全体が一気に開花し、旬日を待たずして一気に落花する。その落花する姿にこの世の儚さ、無常の姿を想うのではないか。桜の散る様子から潔く死ぬことを連想しているのではないか。「花は桜木、人は武士」という諺もあり、昭和10年頃からは、桜の花のように潔く散ることこそ武士道に一致するものとされ、軍国主義に利用されたこともあった。また、瞬時に美しく華やかに咲き、瞬く間に消えて散ってしまう花火を日本人が好んでいることも偶然の一致ではないと考えられる。

韓国でも桜の花見をしたり、花火もするが、日本ほどの騒ぎではない。韓国の国花はムクゲである。ムクゲはいっぺんに咲くのではなく、咲いたのが散ると、次のつぼみから新しい花が咲き、春から秋まで続く。桜のように美しくはないが、素朴かつ清純で、粘り強い。生を惜しむような姿である。

おわりに

侍の社会が生み出した芸術形態が能である。能は鎌倉時代末に誕生し、室町時代に完成

した芸能で、武家の庇護を受けて今日まで続けられている。能では、怨みをもって死んでしまった霊を慰め、僧や神主などが仲裁し、仲直りすることで終わる。仲直りした後の世界はあまり描かれていない。仲直り、幸せな生活を送るという世界があまり描かれていない。同じように、『忠臣蔵』でも 47 人の義士が仇討ちした後、46 人全員が切腹して壮烈に最後を遂げる。これに対して日本の方々には拍手し、声援を送る。これに対して、『春香伝』では、李道令が春香を救った段階では物語が終わらない。そこには李道令が春香と一緒に都へ戻り、そこで結婚して幸せな生活を送るばかりではなく、子孫代々限りなく栄えるもう一つの世界があるのである。

昨今の歴史教科書問題や靖国神社参拝問題などに対して、韓国のマスコミの社説や論評では、日本は「自国中心的に考え、過去の過ちや侵略を美化している」、「過去を清算していない」と強く批判している。それでは韓国人が考えている過去は何であり、その清算とは何であろうか。賢い韓国人は、過去は過去に過ぎないものではなく、現在の財産であり、未来への遺産になると考える。もし、過去を間違っただけで知り、理解するならば、現在を誤って見、未来を誤って導く恐れがあるからである。そのうえ、歪曲された歴史教育を受けた世代が主役になる 22 世紀の日韓関係を懸念しているからである。このように考えると、韓国人が求めている過去の清算とは、壬辰・丁酉倭乱（文禄・慶長の役）や強制合併、植民地支配という過去、その結果、もたらされた相互不信と分裂、反目、痛み、恨み、憎しみ、涙などの諸問題を根本的に解くことである。終戦したことで畏まり、これで終わったのではなく、言葉だけで慎んで歴史的事実を認め、反省し、謝罪することで終わるのではなく、この間の恨みや憎しみなどを解き、仲直りし、隣国として助け合い、理解し合い、国際平和を味わいながら、共存し合う両国の関係を築くことが過去の清算だと考えているのではないだろうか。

韓国と日本は隣の国であるので、歴史的にも文化的にも社会的にも深い関係を持ち、共通点が多い。両国関係で大事なものは両国の共通点より、むしろ異なる点をよく理解し合い、互いに尊重し合うことである。自分の国の思考や文化枠ばかりではなく、相手の国の思考や文化枠から、あるがままの素顔を見、理解する複眼的な思考が必要であろう。相手の社会に対する断層的かつ断面的な知識や理解ではなく、総合的かつ重層的な理解が必要であろう。すべてのことはすべてにつながっているという関係的思考が必要であろう。

注

- 1) 尾崎紅葉『金色夜叉』角川書店(1954); 近代文学館(1968); 新潮社(1992)。
- 2) 『暗行御史朴文秀』名文堂、1987; 『暗行御士列伝・李ムンキ談』名文堂、1989。
- 3) 『忠臣蔵』の場合、『仮名手本忠臣蔵』(服部幸男編著、白水社、1994) (以下では『仮名手本忠臣蔵』ということにする) をはじめ、少なくとも 47 本以上の異本がある。『春香伝』の場合も、50 余本の異本がある。
- 4) 『忠臣蔵』は、人形浄瑠璃として寛延元年(1748 年)8 月 14 日から 11 月中旬までにかけて初演された(『仮名手本忠臣蔵』518 頁)。作者未詳の『春香伝』は 1754 年ごろに登場されたと推定されている。
- 5) 例えば、Fri Sep 3 00:06:39 JST 1999 に良書を紹介している「蟻」という名前の人は、「忠臣蔵を見ると涙が溢れ出てきそうになるのは何故だろう? 主君の無念を晴らすため、大義のため、自らの死を覚悟して吉良邸に討ち入った四十七人の赤穂浪士が眩い輝きを放っていたから

に他ならない。また、この史実は日本の美学そのものである。遊芸や進物を嫌い、実直に生きた浅野内匠頭長矩の人格は武士の鑑であり、2年の歳月を経て仇討ちを果した彼の家臣もまた武士の鑑であった(<http://www.strategy.co.jp/bbs2/bbs2.shtml>)と書いている。『忠臣蔵』の物語に対する批判の声がないわけではない。例えば、三島由紀夫は「浅野家の浪人たちの夜襲にしても、泉岳寺で腹を切らなかったことが、そもそも失敗だといえる。主人がやられたのに、敵を討ち取ることがのびのびとなっていたが、もし、そのうちに吉良殿が病死でもされてしまったら、まったくもって、取り返しのつかないことになる」と言っている(『葉隠入門』新潮文庫、1967、120-121頁)。そして、この仇討ちに対して、「阿呆か、さもなくば不遜な反乱者や危険なテロリストにしか見えない」(<http://www.geocities.co.jp/Bookend/3106/DIARIES/D.../D001241.htm>)とか「仇討ちは私刑、リンチである。江戸時代でさえ御法度であった。現代法治国家に生きる人間が共感するには無理があるだろう」(http://www02.so-net.ne.jp/~s_gakuin/html/society.html)とか「家臣の行く末もまったく考えないで、刃傷ざたに及んだ浅野内匠頭は無責任で、腹がたつ」「刃傷事件を起こせばお家断絶、家臣(家族)を路頭に迷わせることになる。配慮や辛抱が足りない“坊ちゃん”殿様」(<http://www.jic-gifu.or.jp/np/newspaper/column/98/9812.htm#SUN2>)と違和感を持っている人々もいる。

- 6) 今日、仇討ちの日である12月14日には東京の泉岳寺では義士祭が、兵庫県では赤穂義士祭が開かれている。東京の営団地下鉄では、今、まさに門を打ち破ろうとしている臨場感たっぷりの名場面がSFメトロカード「忠臣蔵」を販売している。浅野内匠頭が切腹した田村右京太夫屋敷跡にある和菓子店「新正堂」(東京都港区新橋4-28-3)が「切腹最中」を販売している。泉岳寺の義士お土産店では、47士提灯、陣太鼓、大石内蔵助凧、赤穂義士の絵入(名入)手拭、大石手拭、陣羽織ハンカチ、忠臣蔵時計、忠臣蔵プラモデル、討入や義士せんべい、討入そば、忠臣蔵まんじゅうなどを販売している。兵庫県赤穂市上飯屋赤穂城大手門前の巴屋本舗本店では、塩味饅頭や塩味もなかなどを販売している。
- 7) 忠臣蔵の筋書きに関しては、次のような文献を参照した。『仮名手本忠臣蔵』; 河合敦『忠臣蔵のすべてがわかる本』成美文庫、1998; 高野澄『忠臣蔵とは何だろうか』日本放送出版会、1998; 北影雄幸『義烈! 忠臣蔵武士道』白亜書房、2000; 佐藤忠男『忠臣蔵』朝日新聞社、1976; 丸谷才一『忠臣蔵とは何か』講談社、1988; 大仏次郎原作、松田定次監督『赤穂浪士』東映株式会社、1971年等。
- 8) 一般的に内匠頭長矩と上野介の喧嘩の原因は、長矩が上野介に賄賂を贈らなかったため、上野介に嫌がらせを受けた、と知られている。ところが、近年では、塩の製法による説や精神病説、血統説などもある。
- 9) 『四十七人目の浪士』(池宮彰一郎著、新潮社、1994年)には、泉岳寺に向かう途中、大石に「我らのこの討ち入りの正当性を守るため、そして御家が断絶し残された赤穂侍の行く末を守る為におまえはこの世に残れ」と命令を受け、混乱に陥っている寺坂吉右衛門の様子が描かれている。
- 10) 『仮名手本忠臣蔵』には、吉良上野介義央に擬して高武蔵守師直という人物を登場させているが、本稿の以下では赤穂事件の吉良をそのまま使うことにする。
- 11) 上掲書、321-322頁。
- 12) パンソリとは、朝鮮半島南西部で主に語り継がれてきた口誦芸能である。一人の歌い手が太鼓の音だけに合わせ、痛みにも似た情念を込めながら物語を吟じていく。韓国の浄瑠璃ともいわれる語りの伝統芸能である。
- 13) 2000年5月、イム・グォンテク監督の『春香伝』は第53回カンヌ国際映画祭コンペティション部門に選ばれた。日本でも『春香伝』(許南麒訳、岩波文庫、1988年; 以下では『春香伝』ということにする)及び『新春香伝』(コミック; 白泉社、1996年)として出版されている。以下の『春香伝』の筋書きにはこれらの作品を参照した。
- 14) 道令とは、未婚の男子を少し敬つてという言葉であり、若様、若衆にあたる。

- 15) 地方官庁の僕の総称である。
- 16) 長さ5~6メートル、あるものは20メートルほどもある。若い娘が華やかな原色のチマを風に舞い上げながら空高くのぼる姿は、さながら天女のようなものである。
- 17) 妓生とは、引退した芸伎である。
- 18) 代官の呼び名であり、日本での殿様にあたる。
- 19) 暗行御史とは、李氏朝鮮時代に王命により、ひそかに地方官の治績や非行及び民情を隠密に偵察し、探るため潜行して回った勅使である。ここから、文化的にも民族的にも異なる高句麗、百濟、新羅を統一し、統一国家を形成したのは統一新羅時代(676年~935年)であったが、朝鮮時代(1392年~1910年)にも、まだその影響が強く残っていたことを察することができる。
- 20) 馬牌とは、李朝時代に官吏が公務で地方出張するとき、交通の要所に設けられた官駅で駅馬を徴発するのに使った馬の絵が彫ってある銅製の標識である。描いてある頭数に応じて馬を借りることができた。暗行御史の場合は、身分を隠して暗行するのだから、むろん駅馬に乗らない。したがって、暗行御史にとって、それは身分を証明するしるしであり、普段は帯につるして上着で隠しておいたり、懐にしまっておいたりして、いざというときにこれを開示する。また、はんこの代わりにも使う。つまり、水戸黄門の印籠と同じである。隠岐の国では駅鈴ということがあった。
- 21) 「怨み」と「恨み」は、ともに「うらみ」と読むが、「怨み」は返すことであり、「恨み」は解くことである。
- 22) 『仮名手本忠臣蔵』104, 108, 126, 130 頁
- 23) 『春香伝』72-73 頁。
- 24) 役所をいう。
- 25) 『春香伝』68-78 頁。
- 26) 『仮名手本忠臣蔵』、79-84, 104 頁。同書には、浅野内匠頭長矩に擬して塩治判官高定という人物を登場させているが、本稿の以下では赤穂事件の浅野をそのまま使うことにする。他の人物の名前は『仮名手本忠臣蔵』のそのまま使うことにする。
- 27) もうこれ以上は生きていられない。
- 28) 『仮名手本忠臣蔵』、84-88 頁。
- 29) 『春香伝』41-43 頁。
- 30) 上掲書、111-112 頁。
- 31) ソンビは学識と品格を備えた人に対する呼称である。特に儒教理念を具現する人格体や身分階層を指す。したがって清廉潔白で志操を重視する人、どんな環境でも品位を失わず孤高の精神を維持する人、世俗に染まらず常に学問を愛する人を称する。
- 32) 『仮名手本忠臣蔵』102-104 頁。
- 33) 「四書」は大学、中庸、論語、孟子、「三経」は詩経、書経、周易の三つをそれぞれ称する。
- 34) 『春香伝』83 頁。
- 35) 上掲書、77-78 頁。
- 36) 上掲書、84-85 頁。
- 37) 上掲書、115-116 頁。
- 38) 上掲書、116-117 頁。
- 39) 「賢がる」は、形容詞の「かしこい」の語幹に接尾語「がる」が付いたものであり、「畏まる」の形容詞は、「賢がる」と同じく「かしこい」である。つまり、畏まると賢がるは同じ語幹である「かしこ」からできた動詞である。「かしこ」を漢字で表わすと、「畏、恐、賢」である。「かしこ」の意味は、恐ろしいこと、恐れ慎むべきこと、すぐれていること、すばらしいこと、才能・思慮・分別などがすぐれていること、賢明であること、利口であること等を表わす。そして、「畏まる」とは、①相手の威厳に押されたり、自分に弱点があったりして、恐れ入る。恐れつつしむ。②高貴な人が自分に対して示した行為を、もったいないと思う。恐縮する。③申し

- 訳なく思うようすをする。④目上の人の怒りを受けて謹慎する。⑤つつしみを表わして、居ずまいを正しくしたり、平伏したりする。⑥慎んで命令を受ける。慎んで承諾するの気持ちを表わす等の意味がある。そして、「賢がる」は、思慮深げに振舞う。自分はいかにかしこいのだといった態度をとるという意味をもつ（『日本国語大辞典（縮刷版）』第二巻、小学館、1979、1247-1249頁）。
- 40) 韓国人が何か頑張るときには、むしろ「ウットンウルボッコ」（上着を脱いで）やる。発表会や試験の場に行く子供を励ますときに、「クエンチャウニカ マウムプクノッコ カッタワ」（大丈夫であるので、緊張しないで、心を放して、心を置いて行ってきてね）という。それ故、韓国の文化を解す文化であるともいえる。『最新ハングル大辞典』（ハングル学会、語文閣、1994）によると、マウムウルノッタは「安心する、無関心あるいは意欲を捨てる」という意味をもつ（1288頁）。
- 41) 上掲辞典、411頁。
- 42) 『仮名手本忠臣蔵』188-194頁。
- 43) 上掲書、195-201頁。
- 44) 上掲書、314頁。
- 45) 例えば、朝鮮時代の性理学者は「理」と「気」が触発し合ってものが生まれると考え、理と気のどちらが先に働きかけるかを巡って長い間論争した。
- 46) 新村出編『広辞苑』第三版、岩波書店、1983、1541、1912、1914頁。
- 47) 『日本国語大辞典（縮刷版）』第一巻、小学館、1979、497頁。
- 48) 金容雲「和算と漢算を通してみた日韓文化比較」（<http://www.nichibun.ac.jp/text/fn56.sjis.html>）
- 49) 申維翰『海游録』平凡社、1974、300-301頁。
- 50) 例えば、高松塚の古墳壁画の女性の衣服は高句麗の古墳の女性の衣服とほぼ同じであり、飛鳥の時代までは韓国人と日本人は上下が分かれているツーピースの服を着ていたそうである。その後、韓国では女性はチマ（スカート）とジョゴリ（上着）、男性はバジ（ズボン）とジョゴリという韓国服を、日本ではワンピースである着物をそれぞれ発展させた。そして、七世紀の天智朝、天武朝までは、日本でも箸とスプーンを使ったが、平安時代からは箸だけを使って食事するようになったそうである（http://www.yomiuri.co.jp/sports/wcup2002/special/za.../zadan03_d.ht）。
- 51) 金容雲「韓国の士思想の歴史的考察」『日韓文化論』学生社、105-112頁；金容雲『かしこ型日本人とかちき型韓国人』学生社、1994。
- 52) 721年1月27日の『続日本紀』に「文人・武士は国家の重んずる所」という記事があり（福田豊彦「武士＝在地領主論と武士＝芸能人論の関係」『日本歴史』第601号、1998、99頁）、これが文献的にはじめに見られることである。
- 53) 高橋富雄『武士道の歴史』第1,2,3巻、新人物往来社、1986年；高橋昌明「中世成立期における国家・社会と武力」『日本史研究』第427号、1998年；平川新「武士と役人」『歴史評論』第581号、30-42頁。
- 54) 倉地克直「幕藩制と支配イデオロギー」『講座 日本近世史』3、有斐閣、1980、268頁。
- 55) 新渡戸稲造『武士道』（岩波書店、1938）、25頁。
- 56) 新村出編、前掲辞典、240、234、1284頁。
- 57) 李御寧は、これらの文化の特徴を「締る」文化と「ほぐす」文化として語っている[「韓国文化と日本文化」『日韓文化論』（学生社、1994）18-28頁]。
- 58) 韓国語には紅葉遊び・花見（花遊び）などの用法がある。
- 59) ちなみに、日本ではお箸は木製で横並びに揃えるが、韓国では金属製で縦並びである。武士社会である日本では、お箸のようにいつでも武器になれるのを金属製に作り、そのうえ、相手側に向けてそろえるのは不気味であろう。韓国ではその意識がないので、使いやすく縦並びをしているのではないかと思われる。また、部屋に入る際、日本人は外向きに靴を片付け、いつ襲

うかもしれない敵や災難に備えるのに対して、韓国では入るときの便利さを求め、内向きにそろえる呑気さが見える。韓国では靴を外向きに揃えると、家の中にある福が逃げてしまうのだと考え、むしろ嫌がる。

60) 河合敦、前掲書、はじめに、64頁。

61) 腹を切ること自体は次第に問題になり、一種の名誉刑として形式のみが重要視された。扇子腹などがその例である。腹を切るための小刀さえ必要とせず、小刀のかわりに三方へ扇子を置き、それを手にしたところで介錯人が首を打ち落とすことである。その後、切腹は禁止されたが、明治維新や世界大戦など近代の軍人などの中には古式のままで切腹した例もたくさんある。例えば、明治天皇が亡くなったとき、乃木は妻とともに自殺した。1970年11月25日、作家三島由紀夫は、自衛隊員の前で「憲法改正のクーデター」を訴えた後、割腹自殺した。日本で最初のノーベル文学賞を受賞した川端康成は1972年4月16日、逗子市のマンションの自室で、ガス自殺した。1927年7月24日、日本を代表する文豪である芥川龍之介は25才の若さで、体力の衰えと未来に対する「ほんやりした不安」という理由で睡眠薬自殺した。太宰治も自殺した。自身の文学作品の新鮮なアイデアが出ないとき、あるいは自身の文学作品の最高峰に達したとき、未練を残さず、自殺したのである。ダグラス・グラマン事件が発生したときも、日商岩井常務島田三敬は「会社の生命は永遠です。それを守るために、男として堂々とあるべきです」という遺言を残して自殺した。

62) 三島由紀夫『葉隠入門』（新潮文庫、1967）、98-100頁。

63) 警察庁の調査によると、2000年、1年間の間に日本全国の自殺者は33,048人で、2年連続で3万人を超えた。これは交通事故死者数の3倍強である（『毎日新聞』2000. 8. 18. 3頁）。その背景には、バブル経済崩壊以来、長引く不況が影を落としていることは間違いではないが、日本独自の死生観が反映されているのではないと思われる。

キーワード：畏まる文化 賢がる文化 忠臣蔵 春香伝 頑張る クエンチャナ 遠慮
自慢 実利 名分 刀の文化 筆の文化 死の美学 生の美学 日韓関係
複眼的思考

(Yonggwon PARK)